

# 現代日本語における助数詞への外来語の進出 —抽象的概念を表す「-ケース」を例に—

田 中 佑

## 1. はじめに

本稿は、現代日本語における外来語<sup>1</sup> 助数詞が持つ課題を取り上げ、今後の研究の可能性について述べることを目的としたものである。

日本語の助数詞・類別詞については、水口志乃扶 (2004)、影山太郎・眞野美穂・米澤優・當野能之 (2011) (以下、影山太郎他 (2011) と記す) が次のような分類を示している (外来語助数詞には引用者が下線を付した)。

### ○水口志乃扶 (2004:64)

日本語類別詞の三分類

- a. 個別類別詞：最小単位として個体を個別化する類別詞  
人 (り・ひと)、匹、本、枚、粒、台、丁、個、つ、など
- b. 集合類別詞：個体が集まったグループを最小単位とする類別詞  
対、足、束、輪、山、セット、グループ、列、チーム、など
- c. 計量類別詞：量を測る類別詞  
杯、匙、袋、切れ、抱え、包み、キロ、グラム、トン、など

### ○影山太郎他 (2011:15-19)

#### ◆類別詞

【単体類別詞】：単体を数えるための類別詞

- 〔人 間〕人、名、方 (お二方)、騎 (馬に乗った人)  
 〔動 物〕匹、頭、羽、尾 (魚類)、杯 (タコ、イカ)  
 〔神仏ほか〕体 (遺体、仏像)、人形、ロボット)、柱 (神)  
 〔形 状〕本、筋、条、枚、面 (テニスコート)、葉 (カード)、粒、玉、  
 球、個、滴  
 〔機能ほか〕台、脚 (椅子)、丁 (豆腐)、挺／丁 (包丁、鋤、鍬、銃、三

味線), 語, 通, 篇, 曲, 冊, 部, 卷, 着, 両 (戦車), 隻, 艘, 機, 基 (発電所), 軒, 棟, 戸, 校, 社, 行 (銀行), 店, カ国, 県, 市, 層, 階, 株 (植物, 株式), 輪, ページ, 張り (テント), 振り (刀), 品, 点, 日, 週, ゲーム (試合), 回, 度, 件, 便, 折 (折詰め), 口 (寄付), 犯 (前科)

【グループ類別詞】: 集団 (グループ) を数えるための類別詞

チーム, 班, つがい, 足, 双 (手袋), 膳 (箸), 串 (焼き鳥)

◆計量詞: 対象物の数量を量り取る働きのみをする

【容器ほか】対, 束, 把 (稲), 房 (ぶどう), 山, セット, 組 (スーツ), 列, 連 (数珠), 盛り, 揃い/揃え, 装い (装束), さじ, 杯, カップ, パック, 椀 (汁物), 鉢, 缶, 瓶, 袋, 籠, 箱, 俵 (米), 梱, ケース, 切れ, 抱え, 包み, 掬い, 掻き, 摘み, つかみ, 握り, 巻き, ロール, カット, 折り, 振り (塩)

【計測単位】キロ, グラム, トン, メートル, センチメートル, オンス, リットル, 里, 貫, 匁, 尺, 寸, 升, 合

ここでは, 水口志乃扶 (2004) の個別類別詞, 影山太郎他 (2011) の単体類別詞の外来語助数詞に注目したい<sup>2</sup>。

個別類別詞・単体類別詞は多くの例が挙げられているにもかかわらず, 他の下位範疇と比べて, 外来語の比率が高くない。影山太郎他 (2011) で挙げられている「-ページ」「-ゲーム」も次の点で特殊である。明治時代に「頁」の字があてられ普及していった (広田栄太郎 1969) という「-ページ」の定着過程は計測単位のそれに近く, 「-ゲーム」は, 田中佑 (2014a, 2014b) でも述べたように, 野球の勝ち数の差や, テニスなどの試合の構成単位を表すことがほとんどで, 他の助数詞と比べて慣用的である。このように, 個別類別詞・単体類別詞は, 他の下位範疇と比べ, 外来語が進出しにくい領域であったと捉えられる。

しかし, 近年, 個別類別詞・単体類別詞にも, 次に示すような外来語助数詞が見られるようになってきた<sup>3</sup>。

- (1) ただし, 男性個人に対するヒアリングの中で, 育児休業取得希望を申し出た際に上司が否定的な反応を示したという事例が一ケースあった。 (『男性の育児休業』2004)

- (2) トックリセーターを着た聖子の上半身写真と別カットで撮ったヒット・ビットの製品写真を合成したポスターを主要な駅に四タイプ並べて貼ると、次々と盗まれた。(『ソニー燃ゆ』2001)
- (3) お薦めは、オフの日用の服を季節ごとに上下セットで2～3パターン用意しておくことです。(朝日新聞 2011/4/30)
- (4) 同社の「楽天モバイル」はドコモのLTEに対応する音声付きSIMカードを4プラン用意しており、月額は1250～2960円。大手と比べて最大3分の1になる点がウリだ。[格安スマホ]

影山太郎他(2011)によれば、「日本語には単体類別詞とグループ類別詞の両方があるが、英語には単体類別詞は存在せず、グループ類別詞が少数見られるだけである(p.19)」。そうであるならば、(1)～(4)における外来語は日本語の中で原語にはない助数詞用法を派生させたということとなり、なぜ助数詞用法を獲得し得たのか、という疑問が生じる。

このような問題意識の下、本稿では、具体的な事例として、(5)(6)に示す、「-例」「-事例」などと置換可能な助数詞「-ケース」<sup>4</sup>を取り上げ、日本語における個別類別詞・単体類別詞への外来語の進出について分析を行う<sup>5</sup>。

- (5) 要因で最多は、やはり「うつ病」で305 {ケース/例/事例} のうちの139。(朝日新聞 2008/7/4)
- (6) その後、骨髄移植設備のない病院からの依頼が数 {例/ケース/事例} あり、いずれもほぼ完治しています。(『からだをなおす』2003)

なお、本稿では個別類別詞・単体類別詞への外来語の進出という現象に焦点を当てるが、外来語の進出による助数詞語彙体系全体の変化の記述を研究の最終目標としているため、タイトルには「助数詞」という語を用いている。

## 2. 先行研究

### 2.1. 外来語助数詞

外来語助数詞を取り上げている研究に東条佳奈(2015)がある。東条佳奈(2015)は助数詞「-セット」<sup>6</sup>を共時的な観点から取り上げた研究である。東条佳奈(2015:132-133)によれば、「-セット」は「目的に対して共通の役割を

もつものを、ひとまとめにして数える助数詞」であり、その機能は名詞「セット」の「共通の役割により、ひとまとめにする」という性質に由来するという。また、類義語「-組」との比較から、「-セット」が「その集合を構成する個体同士が「役割」という抽象的な結びつきを持つために、個体の形状の大小や有無を問わず、「組」よりも自由な用法を獲得している」とした上で、「話者の目的によって、自由にまとまりを作ることができる特性があるために「セット」は助数詞として採り入れられたのではないか」、「two sets of ~のように、英語でも数を数える場面で使用されることから、元々助数詞として使われやすかったことが考えられる」とも述べている。

## 2.2. 外来語名詞「ケース」

助数詞「-ケース」を扱った研究は未だ見られないが、外来語名詞「ケース」を扱った研究として金愛蘭 (2006, 2011)、久屋愛美 (2013a, 2013b) が挙げられる。両者はともに「ケース」の基本語化に関する研究である。ここでいう「基本語化」とは、一定の言語使用領域において広範囲・高頻度に用いられる単語の集合を「基本語彙」、その集合の要素を「基本語」と呼んだ場合に、それまで非基本語彙の位置にあった語が基本語の仲間入りをするという現象 (金愛蘭 2006, 2011) を指す。金愛蘭 (2006, 2011) は「ケース」の基本語化の言語内的要因について、久屋愛美 (2013a, 2013b) は「ケース」の使用増加の言語外的要因について分析を行っているが、ここでは、本稿の問題意識と関連の深い前者から、特に詳しい分析が提示されている金愛蘭 (2011) のみを取り上げ、概観する。

金愛蘭 (2011) は「ケース」について、以下の2つの調査を行っている。

- I. 1950年、60年、70年、80年、90年、2000年の『毎日新聞縮刷版』(1990年は『CD-毎日新聞'91データ集』を、2000年は『CD-毎日新聞2000データ集』を用いている)の毎月5日、15日、25日(休刊日の場合には翌日分をあてる)の計36日分の朝刊全紙面(東京地方版・大阪本社版の紙面は除く)を用いた通時的調査<sup>7</sup>
- II. 『CD-毎日新聞2000データ集』の毎月5日、10日、15日、20日、25日(休刊日の場合には翌日分をあてる)の計60日分の朝刊全紙面(東京地方版・大阪本社版の紙面は除く)を用いた共時的調査

金愛蘭 (2011) は、調査 I の結果から、「ケース」は「1970 年ごろまでには基本語化したと考えることができる (p.92)」とし、さらに、類義語「事例」「例」「場合」との共時的・通時的比較から、次の 4 点を主張している。

- ・「ケース」は単独形式、合成語の構成要素、名詞句の被修飾語、連体修飾節構造の被修飾語のうち、連体修飾節構造の被修飾語として用いられることが圧倒的に多く、連体修飾節構造における客観的同格連体名詞<sup>8</sup>という形式 (用法) において最も多用されている。
- ・「ケース」は同格連体名詞用法において、「すでに起こった良くない (好ましくない) コトガラ」を表すのに用いられることが多い。
- ・「ケース」は 20 世紀後半をとおして連体修飾節構造の被修飾名詞での使用が増加しており、単独形式および合成語の構成要素として多く使用されるようになった「例」との間に、用法の分担が見て取れる。
- ・同格連体名詞における「ケース」は、はじめから「既然」のコトガラを表すことが多かったが、1970 年から 80 年あたりで、「正・中立」よりも「負」のコトガラを多く表すようになり、また、主節述語の意味範囲も類義語より多様になった。

加えて、金愛蘭 (2011) は合成語の構成要素としての「ケース」の検討の際に、具体的な用例の提示や言及は行っていないが、次の表を挙げて、「ケース」は助数詞としてはたらくことも非常に少ないと述べている。

表 1 「合成語」形式の用例数 (延べ)

	ケース	事例	例	場合
複合語	10	25	32	0
助数詞	1	1	22	0
接頭辞的	3	5	0	0

(金愛蘭 2011:96)

### 3. 外来語助数詞研究における課題

本節では、前節で概観した先行研究を、金愛蘭 (2011)、東条佳奈 (2015) の順で取り上げ、その批判的検討から見えてくる、外来語助数詞を検討する際



なく) 原語からは名詞として輸入され、のちに日本語の中で助数詞用法を派生されたというプロセスである。日本語の助数詞体系への採用という観点を取った場合、このどちらのプロセスを経たかによって、言語現象としての位置付けは大きく異なる。

東条佳奈 (2015) は共時的な分析であるため、「-セット」の助数詞体系への採用プロセスについては研究の範囲外であるが、助数詞体系に「採り入れられた」と考えるならば、そのプロセスについても論じる必要がある。このようなプロセスに関する議論は、外来語助数詞すべてに共通する課題である。

ここまで述べてきた外来語助数詞研究における課題を以下にまとめる。

- ・日本語では数詞と名詞が直接結合することがあるため、当該の外来語が日本語において助数詞と認定できるかを確認しておく必要がある。これは、名詞と同じ形態を有する助数詞すべてに共通する。
- ・外来語助数詞がどのような過程を経て助数詞体系に採り入れられたかによって、現象の位置付けが大きく変わるため、採用のプロセスを明らかにしておく必要がある。

#### 4. 事例研究

本節では、個体類別詞・単体類別詞に属すると捉えられる外来語助数詞「-ケース」を取り上げて事例研究を行う。前節までの議論を踏まえ、次の3点を助数詞「-ケース」に関する課題とし、類義語との比較などをとおして各課題について論じていく。

- ①: 「-ケース」は助数詞として認定可能か。(4.2 節)
- ②: 助数詞と認定されるとして、「-ケース」はいつ、どのようなプロセスで、助数詞用法を確立させたのか。(4.3 節)
- ③: 助数詞と認定されるとして、「-ケース」はなぜ助数詞体系に入り得たのか。(4.4 節)

比較対象については、金愛蘭 (2011) が挙げている「ケース」の類義語「事例」「例」「場合」のうち、数詞と結合可能な「事例」「例」を取り上げる。

#### 4.1. データについて

この4節では、『神戸大学デジタル版新聞記事文庫』、朝日新聞社が提供する『聞蔵Ⅱビジュアル』の「朝日新聞」、国立国語研究所が提供する『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』『明六雑誌コーパス』『国民之友コーパス』『『国会会議録』パッケージ』から得た用例を主たるデータとして考察を進めていく<sup>10</sup>。

まず、それぞれがカバーする範囲を【図2】に示す。

西 暦	1868	1912	1926	1989	2016
和 暦	M1	T1	S1	H1	H28
明 六	-				
国 民	-				
女 性	—————				
太 陽	—————				
神 戸		—————			
国 会				—————	
均 衡				—————	
朝 日				—————	

図2 各コーパス・データベースがカバーする範囲

『神戸大学新聞記事文庫』は明治末から昭和45年までの商業・経済を中心とした新聞記事の切り抜き約50万件をベースとした資料である。そのデジタル版である『神戸大学デジタル版新聞記事文庫』では、1911(明治44)年から1945(昭和20)年までの約30年分の資料の一部を検索・閲覧することができる<sup>11</sup>。本稿では、その全期間を対象に調査を行った。『神戸大学デジタル版新聞記事文庫』以前については、国立国語研究所の4つの雑誌コーパスを用いて補完する。それぞれの範囲は、『明六雑誌コーパス』が1874(明治7)年から1875(明治8)年、『国民之友コーパス』が1887(明治27)年から1888(明治28)年、『近代女性雑誌コーパス』が1894(明治27)年から1925年(大正14)、『太陽コーパス』が1895年(明治28)年から1925年(大正14)年である<sup>12</sup>。本稿では、以上の

コーパス・データベースから得た用例を近代語のデータとして扱う。

現代語については、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『聞蔵Ⅱビジュアル』の「朝日新聞」を用いる<sup>13</sup>。前者については、用例の確保を優先するため、非コアデータを含むすべて（1976年から2005年）を対象とし、後者については、「本文」「朝刊」「本紙」「東京発行所」を検索対象、1985年1月1日から2014年12月31日の30年を検索期間とした。

1947年から2012年のデータを含む『『国会会議録』パッケージ』については、上述の近代語と現代語をつなぐものとして位置付ける。こちらについては、「本会議版」「予算委員会版」の両方を対象とした。

ジャンルや各年のデータ量が統一されていない、などといった問題もあるが、さらなる調査は今後の課題とし、本稿では、以上のコーパス・データベースを用いることとする。

#### 4.2. 助数詞の認定基準と「-ケース」

まず、課題①「「-ケース」は助数詞として認定可能か」について見ていく。

当該要素が助数詞と捉えられるか否かについては、これまでにいくつかの判断基準が提示されているが、本稿では、田中佑（2012, 2014b）の議論を援用し、(8)を助数詞用法の認定の基準として用いる<sup>14</sup>。

- (8) a. 数詞と結合して数量詞を成す
  - b. 数を表現される名詞と共に起し、かつ、副詞的位置に生起する
- (田中佑 2014b:26)

この基準を採用するのは、(8)が数詞と結合することで当該要素に生じた文法レベルの質的变化を捉えることができるためである。

- (9) a. リーグ戦の試合を観戦した.
- b. \*リーグ戦を試合観戦した.
- (10) a. リーグ戦の消化試合を観戦した.
- b. \*リーグ戦を消化試合観戦した.
- (11) a. リーグ戦の3試合を観戦した.
- b. リーグ戦を3試合観戦した.

普通名詞である「試合」は、単独、もしくは、複合語の後項にある場合には副詞として振る舞うことはできない(= (9b) (10b)) が、数詞と結合すると、それまでは出ることのできなかった副詞の位置に生起することができるようになる(= (11b)). これは、数詞と結合することで名詞「試合」に文法的性質の変化が起こり、助数詞として機能することができるようになったということの意味している。

現代語で数詞と結合した「ケース」を見てみると、以下に示すような、(8)を満たす例が確認される。また、類義語である「例」「事例」にも助数詞用法が見られる((12)は(1)の再掲である)。

- (12) ただし、男性個人に対するヒアリングの中で、育児休業取得希望を申し出た際に上司が否定的な反応を示したという事例が1ケースあった。(『男性の育児休業』2004)
- (13) 日本総合研究所の西沢和彦主任研究員に依頼し、保険料率を固定した場合の年金額を4ケース試算したところ、凶のような結果が出た。(朝日新聞 2002/6/19)
- (14) その結果、メーチャーとしての出家の事例が13ケース、ネーンとしての出家の事例が2ケースあることがわかった。(『宗教実践』 p.11, 2001)
- (15) 米国では6月にも感染の疑いのある牛が2例見つかったが、追加検査によって、どちらも感染していないことが確認された。(朝日新聞 2004/11/19)
- (16) ここに政府の支援が特に有効だったという科学技術分野における成果が12事例紹介されているが、どうにもお手盛り感がぬぐえない。(朝日新聞 2009/7/22)

以上より、「-ケース」、および、その類義語「-例」「-事例」は現代語で助数詞として認定できる。

ここで、現代語における「-ケース」「-例」「-事例」の用例数を見ておく。【表2】では、数詞(0~9, 一~十, 百, 千, 万), 概数詞「数-」, 疑問数詞「何-」「幾-」と結合した3語を集計している。

表2 現代語における「-ケース」「-例」「-事例」の総用例数

	「-ケース」	「-例」	「-事例」
均衡 (1976～2005)	11	1,696	26
朝日 (1985～2014)	75	6,840	139
合計	86	8,536	165

「-例」は、8,536の用例のうち、3,895例(45.6%)が数詞「一」との結合であった。しかし、それを差し引いても、3語の中では突出して用いられていると言える。一方、「-ケース」「-事例」については、「-例」のような結合する数詞の偏りは見られなかった。

次に、用例数の少ない「-ケース」と「-事例」について、「朝日新聞」における各年の用例数を見てみる。

表3 朝日新聞(1985～2014年)各年の「-ケース」「-事例」の用例数

	-ケース	-事例		-ケース	-事例		-ケース	-事例	
'85	0	0	'95	0	0	'05	0	2	
'86	4	1	'96	1	0	'06	3	2	
'87	1	0	'97	0	0	'07	3	3	
'88	4	2	'98	0	0	'08	3	0	
'89	0	2	'99	0	0	'09	5	5	
'90	7	1	'00	0	1	'10	2	3	
'91	4	6	'01	1	1	'11	2	0	
'92	1	4	'02	7	6	'12	7	1	
'93	0	2	'03	5	0	'13	3	4	
'94	0	1	'04	4	3	'14	8	89	
							計	75	139

「-事例」の2014年の89という数値について詳細を確認すると、そのうちの83の用例が「集団的自衛権」に関する記事での使用であった。これを加味すると、「-ケース」「-事例」の使用状況は、数値上はほぼ変わらず、また「-ケース」は、金愛蘭(2011)が述べるように、現代語において頻繁には使

用されていないと捉えられる。「-事例」も同様である。しかし、「-例」と「-ケース」「-事例」の間の使用頻度の差は、後二者が現代語において助数詞と認められないことを意味するものではない。そのため、本稿では、現代語には助数詞「-ケース」「-例」「-事例」が認められると考え、議論を進める。

#### 4.3. 外来語助数詞「-ケース」の成立の時期とプロセス

先に述べたように、外来語助数詞については、どのような過程を経て日本語の助数詞体系に採用されたかによって、現象の位置付けが大きく異なってくる。「-ケース」についても、次のような表現が可能なため、明治から戦前、戦後にかけてどのように用いられていたかを確認する必要がある。

(17) There were 16 cases of damage to cars in the area.

([Longman] p. 247)

これを踏まえ、本節では、課題②「「-ケース」は、いつ、どのようなプロセスで、助数詞用法を確立させたのか」について考察を行っていく。

まず、各コーパス・データベースの用例数を確認する。こちらについては、数詞（一～十、百、千、万）、概数詞「数-」「余-」、疑問数詞「何-」「幾-」、および、存在する場合は各異体字と結合した3語を集計している<sup>15</sup>。なお、近代語の「ケース」については「ケイス」という表記も調査した。

表4 近代語における数詞と結合した「ケース」「例」「事例」の総用例数

	「ケース」	「例」	「事例」
明六 (1874～1875)	0	2 (2)	0
国民 (1887～1888)	0	28 (28)	0
女性 (1894～1925)	0	31 (24)	0
太陽 (1895～1925)	0	306 (288)	5 (4)
神戸 (1911～1945)	0	6,888 (6,569)	90 (73)
合 計	0	7,255 (6,911)	95 (77)

【表4】の括弧内の数値は数詞「一」との結合数である。「-例」は95.2%が数詞「一」との結合であり、結合する数詞に現代語よりもさらに大きな偏りが

見られるが<sup>16</sup>、すでに助数詞の認定基準である(8)を満たす用例が確認できる。

- (18) さて余り序論が長くなりましたが、私共は斯ういう風な国を旅行して古建築や遺跡の数々を見物致しましたが、其の一々に就いて詳しく申上げると矢鱈に長くなりますから此処には其の代表的なものを数例取ってお話しすることに止めます、

(大阪朝日新聞 1916/9/25)

- (19) 今日の実況を觀ると、此工場建設の位置選定を誤ったために生産費を二割五分も高めて居るものが数例ある。

(大阪朝日新聞 1921/11/25-1921/11/30)

もう一つの類義語「-事例」については、(8)を満たす用例は見られなかったが<sup>17</sup>、数詞と結合した用例は確認された。しかし、その81.0%が数詞「一」との結合である。また、「一」以外の数詞と結合している例は、『太陽コーパス』から1例、『神戸大学デジタル版新聞記事文庫』から17例であったが、後者の17例については、1つの記事の中で複数回使用されているものが多く、「一」以外の数詞と結合した「事例」は4つの記事にしか見られなかった。(20)に「一」と結合した用例を、(21)(22)にそれ以外の数詞と結合した用例を示す。

- (20) 斯の銀兩を暫時の間日本の大阪に廻し之を円銀に改鑄すれば半季に一千萬兩、一年には二千萬兩が円銀となって再び支那の市場に現われるのである上海一支店の一事例を挙げても斯うである、

(日本新聞 1912/3/6-1912/3/9)

- (21) 此の二事例を挙げたる後氏は其の結語を下して曰く

(『太陽』10号1909)

- (22) 低利債への借替に依るもの最多く、六十事例中四十五はそれでの他は当事者間の条件改訂、財産処分<sup>の</sup>斡旋、貯金の積立、等に依るものである

(時事新報 1933/2/14)

以上から、近代語における「-事例」は、数詞と結合はするものの、現代語よりも制限が強く、また、助数詞としては用いられないなど、現代語とは異なる使用状況だったことが窺える。

一方、「ケース」は、名詞としての使用が『国民之友コーパス』から1例、『神

戸大学デジタル版新聞記事文庫』から 11 例確認されたが、(8) を満たす用例はおろか、数詞と直接結合している用例さえも確認されなかった。下に名詞「ケース／ケイス」の用例を示す。

- (23) 福音にも心ある者、云はば即ち貳心的の人物、豈よく一方を賣るの劣等人たるを免れんや、不肖よく之れを知る、然れども斯言及び斯言の意味合を移して、在桑港日本人のケースに當込むとするは不肖の服する能はざる所なり、  
(『国民之友』28号1888)
- (24) 現に斯の如くして設立せられたる會社數十餘此の資本金二百五十萬弗餘に達せり尚ほテスト、ケイス即ち試訴提起の如きも一方法たるを失はざるも其の時機方法等に至ては慎重の考査を要し以て遺漏過失無きを期せざるべからず  
(時事新報 1913/8/31-1913/9/2)
- (25) この場合個々のケースについて、それ／＼罰則を設けてゐるが問題は主務大臣が組合の價格を不當とし、または代つて價格を公定する場合のその基準である。  
(大阪朝日新聞 1935/3/10)
- (26) 一、配電のみで經營繼續の可能なる場合に更に二つのケースを想定することが出来る、  
(大阪時事新報 1938/10/23)

金愛蘭 (2011:91) は 2000 年の毎日新聞朝刊 36 日分における名詞「ケース」の用例数が 174 例であったことを報告している。そこから、「ケース」は、近代語においては、名詞としての使用も極僅かであったことがわかる。

本節での観察と、4.2 節で行った現代語の観察との比較から、「ケース」「例」「事例」の 3 語について、以下の指摘ができる。

- 「ケース」：現代語では助数詞として機能するが、近代語では数詞と結合した用例も見られず、また、名詞としての使用も僅かである。
- 「例」：結合する数詞に偏りが見られるが、近代語の時点ですでに助数詞用法を確立している。
- 「事例」：現代語では助数詞として機能するが、近代語では数詞と結合するものの、助数詞としては用いられず、また「一」との結合に偏る。

ここから、「ケース」の輸入と、助数詞として使用の間には時間的なずれが

存在することがわかる。したがって、助数詞「-ケース」は、【図1】で示した過程②「原語からは名詞として輸入され、のちに日本語内で助数詞用法を派生されたというプロセス」を辿った可能性が高いと考えられる。

では、「ケース」はいつ頃から助数詞として用いられるようになったのか。

【表5】に、近代語で助数詞用法が確認されなかった「ケース」「事例」に関する『国会会議録』パッケージ』の調査結果を示す。

表5 『国会会議録』パッケージ』における数詞と結合した「ケース」「事例」

	「ケース」	「事例」
本会議 (1947～2012)	3	12
予算委員会 (1947～2012)	37	21
合計	40	33

(27) が数詞と結合した「ケース」のもっとも古い用例である。

- (27) ひとり自動車だけではありません。肥料も行っております。薬品も行っております。旋盤も行っております。(中略) デンマークのごときは、チンコムの違反を明らかに犯したこと四ケース、チンコムの委員会にかかった。(衆議院第26回予算委員会 1957/2/9)

しかし、「ケース」「事例」ともに、『国会会議録』パッケージ』からも、助数詞認定基準である(8)を満たす用例は得られなかった。そのため、4.1節で取り上げた(28)(= (14))が助数詞「-ケース」の、(29)(= (16))が助数詞「-事例」の本稿で行った調査の初出例ということになる。

- (28) その結果、メーチャーとしての出家の事例が13ケース、ネーンとしての出家の事例が2ケースあることがわかった。

([宗教実践] p.11, 2001)

- (29) ここに政府の支援が特に有効だったという科学技術分野における成果が12事例紹介されているが、どうにもお手盛り感がぬぐえない。(朝日新聞 2009/7/22)

以上より、助数詞「-ケース」は近代語において名詞として用いられ始め、

2000 年前後に助数詞用法を派生させたと捉えられる。

#### 4.4. 助数詞「-ケース」成立の要因

ここまで、近代から現代における用例の観察から、「ケース」が 2000 年前後に助数詞用法を派生させたと考えられることを示した。しかし、「-ケース」の類義語には、圧倒的な用例数を誇る「-例」と、数詞と結合した場合の使用状況が類似している「-事例」が存在する。後者は「ケース」よりも早くから数詞と結合して用いられており、また、前者に至っては近代の時点で助数詞として用いられていた。このような状況の中にあった「ケース」が「なぜ助数詞体系に入り得たのか（課題③）」という点について、本節では、意味的側面、および、外来語の基本語彙への定着という 2 つの側面から考察を加えていく。

##### 4.4.1. 意味的側面から見る助数詞「-ケース」成立の要因

先に述べたように、「-ケース」は「-例」「-事例」と置換可能である。(5) (6) を (30) (31) として再掲し、さらに、いくつかの例を加える。

- (30) 要因で最多は、やはり「うつ病」で 305 {ケース／例／事例} のうちの 139. (朝日新聞 2008/7/4)
- (31) その後、骨髄移植設備のない病院からの依頼が数 {例／ケース／事例} あり、いずれもほぼ完治しています。(『からだをなおす』2003)
- (32) このうち、着工優先順位の論議的になるとみられる「八戸開業」「長野開業」「熊本開業」の 3 {ケース／例／事例} について、新幹線未開業時と比べた収支改善効果をみると、開業翌年で八戸が 20 億円、熊本が 44 億円のそれぞれマイナスだが、長野は 12 億円収支が改善。(朝日新聞 2012/9/7)
- (33) 本書は英国や欧州のそんな 社会起業家らの活動 25 {事例／ケース／例} を図版とともに紹介。(朝日新聞 2014/9/14)

しかし、常に置換が可能というわけではない。

- (34) 今後支払いが必要になる公的年金債務をどう計上するかによって 3 {ケース／??例／??事例} を試算。(朝日新聞 2003/9/13)
- (35) 採取した用例は四千七百六 {例／??ケース／??事例} である。

(『日・韓国語の慣用的表現の対照研究』2002)

以下、「-ケース」と類義語の互換の在り方から「-ケース」の意味的特徴を記述していく。

#### 4.4.1.1. デキゴトとモノ

まず、(31) (33) と (35) の対比について考える。(31) は「骨髄移植設備のない病院からの依頼」の数を、(33) は「社会企業家らの活動」の数を表現している文である。一方、(35) は「採取した用例」の数を表現している。前者はデキゴトであるのに対し、後者はモノである。このように、「-例」はデキゴトの数もモノの数も表現できるが、「-ケース」「-事例」はモノの数を表現する際には使用しにくい。類例を挙げる。

- (36) 次に、敦煌莫高窟に壁画として現存する作例である。現在、如意輪観音菩薩像が十六 {例/??ケース/??事例} 確認され、そのいずれも蓮華座上に輪王坐を組む坐像である。(『仏教芸術』2002)

(30) についても、この例は「自殺数、地域別に分析 NPOなどが警察単位で「予防に活用を」という記事からの抜粋であり、デキゴトである「自殺」の数が表現されていると捉えられるため、「-ケース」「-事例」が許容されると考えられる。

#### 4.4.1.2. Token解釈とType解釈

次に、(34) について取り上げる。(34) では、「-ケース」のみが許容され、「-例」「-事例」は許容されない。これには、先のデキゴト・モノの対立とは異なる説明が必要となる。このタイプの「-ケース」は「-例」「-事例」よりも「-種類」「-パターン」に近い。実際、置換も可能である。

- (37) 今後支払いが必要になる公的年金債務をどう計上するかによって 3 {ケース/??例/??事例/種類/パターン} を試算。

(朝日新聞 2003/9/13)

- (38) エネルギー政策を検討する経済産業省の委員会での議論を踏まえ、全電力に占める原発の比率について 「2020年に0%」「30年に

20%」「35%を維持」の3 {ケース/??例/??事例/種類/パターン}  
を設定。 (朝日新聞 2012/3/29)

- (39) 開門調査の方法として全開門, 段階的開門, 流量などを考慮した調整型開門の三 {ケース/??例/??事例/パターン/種類} を想定。  
(Yahoo! ブログ 2008)

この「-ケース」と「-例」「-事例」の相違は、「-ケース」が有するToken解釈とType解釈という2つの解釈によるものと考えられる。Tokenとは個々に存在する具体的な事物、Typeとは抽象的な型である。「-例」「-事例」と置換可能な「-ケース」は、たとえば(33)ならば、「社会企業家らの活動」が具体的なデキゴトとして個々に存在し、それが25あることを表している。これがToken解釈である。一方、「-種類」「-パターン」と置換可能な「-ケース」はType解釈である。(38)を例に挙げるなら、「2020年に0%」などは、それが実現されれば、具体的にどのような過程を経たかは問題にされず、様々にあり得る具体的なプロセスを経た結果の抽象的な型として提示されている。したがって、(35)はType解釈しかできない環境であるため、「-ケース」のみが許容され、「-例」「-事例」は許容されなかったと考えられる。

また、Token解釈とType解釈には、(40) (= (32)) のように、どちらでも読める文が存在する。

- (40) このうち、着工優先順位の論議の的になるとみられる「八戸開業」「長野開業」「熊本開業」の3 {ケース/例/事例/種類/パターン} について、新幹線未開業時と比べた収支改善効果を見ると、開業翌年で八戸が20億円、熊本が44億円のそれぞれマイナスだが、長野は12億円収支が改善。 (朝日新聞 2012/9/7)

しかし、(37)～(39)のようにType解釈の文に「-例」「-事例」は生起できず、また、(41) (= (31)) (42) (= (33)) に示すように、Token解釈の文に「-種類」「-パターン」が生起できないことから、2つの解釈は同時に成り立つことができなく、相補的であると捉えられる。

- (41) その後、骨髄移植設備のない病院からの依頼が数 {例/ケース/事例/??種類/??パターン} あり、いずれもほぼ完治しています。

(『からだをなおす』2003)

- (42) 本書は英国や欧州のそんな社会起業家らの活動25 {事例／ケース  
／例／??種類／??パターン} を図版とともに紹介。

(朝日新聞 2014/9/14)

また、2つの解釈とデキゴト・モノの対立の関係であるが、Type解釈は抽象的な型を提示するものであるため、具体的事物の分類であるデキゴト・モノの区別が入り込む余地はない。したがって、デキゴト・モノの対立はToken解釈にしか関与しない。

#### 4.4.1.3. 助数詞「-ケース」と名詞「ケース」の意味的なつながり

助数詞「-ケース」、および、類義語「-例」「-事例」の意味に関するここまでの議論をまとめると【表6】のようになる。

表6 助数詞「-ケース」「-例」「-事例」の意味

	Token (モノ)	Token (デキゴト)	Type
「-ケース」	×	○	○
「-例」	○	○	×
「-事例」	×	○	×

ここで、助数詞「-ケース」と名詞「ケース」との関係について考える。

金愛蘭(2011)は、上述のように、名詞「ケース」が「すでに起こった良くない(好ましくない)コトガラ」を表す際に類義語よりも多用されていることを指摘している。

助数詞「-ケース」によって数を表現される事態に「好ましくない」という偏りは見られなかった。しかし、「すでに起こった」という意味特徴は、Token解釈の助数詞「-ケース」に確認された。用例として挙げた(30)(31)(33)を含め、今回の調査で得られたToken解釈の「-ケース」はすべて「すでに起こった」と捉えられるものであり<sup>18</sup>、このような「-ケース」は、「-例」「-事例」と置換可能なことから明らかなように、名詞「例」「事例」と類義関係にある名詞「ケース」との連続性で捉えることができる。

- (43) 大綱が想定する水害は、埼玉県加須市にある利根川の堤防と東京都北区にある荒川の堤防が豪雨で決壊した2 {ケース／例／事例／??種類／??パターン} と、東京湾が超大型の台風による高潮被害を受けたケースだ。  
(朝日新聞 2012/9/7)

一方、Type 解釈の場合、助数詞「-ケース」は (37)～(39) のように「試算」「設定」「想定」などの述語と共起することが多く、それによって数を表現される事態は「未実現」として解釈される。これは一見すると、金愛蘭 (2011) が指摘する名詞「ケース」の特徴と合致しないように見える。しかし、金愛蘭 (2011) の指摘は名詞「ケース」が未実現の事態を表せないことを意味しておらず<sup>19</sup>、また、Type 解釈の助数詞「-ケース」も、次のような点を加味すると、名詞「ケース」の特徴を引き継ぐものとして捉えることが可能となる。

名詞「ケース」の類義語の一つである「場合」について、佐野裕子 (2008) は、接続助辞用法の「場合」は法則や習慣といった超時的事態を表す、もしくは、未実現事態を表す例が圧倒的に多いことを指摘している。

- (44) 一定の分野において、特定集団が圧倒的に優勢である場合、そのリーダーが社会的にクローズ・アップされ、脚光をあびる。(=法則)
- (45) 私は文書を公開する場合、自分の好みは一応棚上げし、14ポイント程度の表示を前提にしてHTML文書を作成することになっている。(=習慣)
- (46) 兄さんといっしょに暮した場合、僕は、こんどは、本当に兄さんを刺すときがくるような気がするんです…(=未実現事態)  
(佐野裕子 2008:144)

「ケース」は接続助辞用法を持たないため、上記の「場合」との置換は不可能であるが、形式名詞「場合」が未実現の事態を表す際は「ケース」との置換が可能となる。

- (47) 個人で在庫を抱える {場合／ケース} は特に注意が必要である。

つまり、Type 解釈の助数詞「-ケース」は、未実現の事態を表す「場合」と

類義関係にある名詞「ケース」との関係で捉えられるのである。

Type 解釈は類義の助数詞「-例」「-事例」にはない解釈であり、また、そのような解釈を持つ「場合」は数詞と結合することができない。したがって、「ケース／-ケース」は類義語間の名詞・助数詞用法でもっとも広い意味範囲と形態的分布を持つ語として位置付けられる。このような意味・形態的分布の優位性を持つため、「-ケース」は助数詞体系に入ることができたと考えられる。

#### 4.4.2. 外来語の基本語彙への定着の影響

前節では、「-ケース」が類義語よりも意味・形態的分布において優位性を有するために助数詞体系に入り得たことを指摘した。ここで問題となるのが、用法の成立がなぜ 2000 年前後だったのか、という点である。

1 節では、「-ケース」に加え、「-タイプ」「-パターン」「-プラン」を個別類別詞・単体類別詞への進出が確認される外来語の例として挙げた。これらはすべて、助数詞の認定基準 (= (8)) を満たすものであるが、用例はいずれも最近のものである。

金愛蘭 (2011:6) は、外来語の基本語化は「20 世紀の後半を通じて徐々に進行し、20 世紀末になって顕在化してきたのではないかと想像できる」とする。国立国語研究所による「外来語」言い換え提案の時期 (2002 年～2006 年) を考えても、金愛蘭 (2011) の想像のとおりであろう。これは、外来語が基本語彙に定着したのが、20 世紀末～21 世紀初頭にかけてであったことを意味する。

以上から、計量詞や集合類別詞との関係も考えなければならないが、少なくとも、個別類別詞・単体類別詞に関しては、外来語が基本語彙に定着し、日本語の基本語彙において外来語比率が増加したことが、「-ケース」を含む外来語の当該範疇への進出に影響を与えたことが予測される。しかし、これについては、あくまで仮説であり、上に挙げた語を含め、今後さまざまな語を取り上げて検証していく必要がある。

## 5. まとめと今後の課題

以上、本稿では、現代日本語における助数詞への外来語の進出、特に、個別類別詞・単体類別詞領域への進出について取り上げ、「-ケース」を例に議論を行った。

その中で外来語助数詞を扱う際に、注意が必要な点として以下の点を挙げた。

- ・日本語では数詞と名詞が直接結合することがあるため、当該の外来語が日本語において助数詞と認定できるかを確認しておく必要がある。これは、外来語のみならず名詞と同じ形態を有する助数詞すべてに共通する。
- ・外来語助数詞がどのような過程を経て助数詞体系に採り入れられたかによって、現象の位置付けが大きく変わるため、採用のプロセスを明らかにしておく必要がある。

以上を踏まえて行った「-ケース」に関する事例研究では、次の3点を示した。

- ・助数詞「-ケース」は、原語からは名詞として輸入され、のちに日本語内で助数詞用法を派生されたというプロセスを辿り、2000年前後に助数詞用法を確立させた。
- ・「-ケース」は、類義語である「-例」「-事例」も有するToken解釈に加え、それらにはないType解釈を有する。このような類義語に対する優位性を持つため、「-ケース」は助数詞体系に入ることができた。
- ・「-ケース」を含む個別類別詞・単体類別詞への外来語の進出には、外来語の基本語彙への定着が影響している。

次に、本稿に残された課題について述べる。

まず、個別類別詞・単体類別詞領域へ進出した外来語の特定である。本稿では、「-ケース」に加え、「-タイプ」「-パターン」「-プラン」の例として挙げたが、その他にどのような語が存在するのかについては明らかでない。総体を知るためにもある程度の規模の調査が必要であると言える。

また、上述の「-ケース」に関する成果の3点目と関連して、当該の現象が近年になって同時多発的に見られるようになったものなのか、それとも、それ以前から個々の語について散発的に生じていたものなのかについても調査が必要である。仮に、個別類別詞・単体類別詞への外来語の進出が同時多発的な現象であるならば、それは日本語の語彙全体がそれを許容する状態になったことを意味する。このような現象全体の位置付けの問題も課題である。

このように課題も多いが、本稿で取り上げた個別類別詞・単体類別詞領域への外来語の進出という現象は、それ自体が現在進行中のものであり、これまで取り上げられることのなかった日本語学における未開拓領域である。したがって、個々の語の分析や変化の類型化など、さまざまな研究の可能性を持つと言える。本稿がそのような研究の足掛かりになれば幸いである。

## 付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金 課題番号 16H06653 「近現代日本語における助数詞の新生に関する語彙論的研究」(研究活動スタート支援, 平成 28 年度～平成 29 年度, 研究代表者: 田中佑) の助成を受けて行われた研究の成果の一部である。

## 注

- 1 本稿が用いる「外来語」という用語は、いわゆるカタカナ語を指すが、その中でも特に、幕末から明治初期にかけて増加した英語からの外来語を想定している。
- 2 水口志乃扶 (2004) は下位範疇すべてを類別詞と捉えるのに対し、影山太郎他 (2011) は対象物の意味カテゴリーによる制限を受けない計量詞を類別詞とは考えないなど、両者に違いは見られるが、本稿の関心である個別類別詞・単体類別詞に関しては、両者の見解は一致しているため、分類の相違についてはここでは立ち入らない。なお、両者の相違については北原博雄 (2016) が詳しく論じている。
- 3 出典を記した用例は実例である。新聞の用例については、「新聞名・発行日」を、『日本語書き言葉均衡コーパス』などのコーパスから得た用例については「書誌名・(巻号)・発行年」を出典として記す。また、Web などから得た用例については [ ] で略称を示し、用例出典欄に詳細を記す。なお、実例への強調は引用者によるものであり、例文内で置換を行っているものについては、左を原典に統一する。
- 4 本稿では、助数詞と捉えられる要素には直前に「-」を付し、名詞と区別する。ただし、引用部はその限りではない。
- 5 本稿では、影山太郎他 (2011) の計量詞に挙げられている容器を表す「-ケース」については扱わない。以下の調査においても、容器を表すものについては、文脈から判断し、手作業で排除している。
- 6 「-セット」は、水口志乃扶 (2004) では集合類別詞、影山太郎他 (2011) では計量詞とされているが、東条佳奈 (2015) にはこの点に関する言及は見られない。
- 7 一部、毎月 5 日、25 日の計 24 日分のデータで議論を行っている箇所もある。
- 8 奥津敬一郎 (1974) による連体修飾の類型の一つである「付加名詞連体修飾」(連体修飾節内に被修飾名詞と同一の名詞を含まない連体修飾構造) のうち、「叙述文が表現する内容を客観的な事柄、状態としてとらえて名詞化 (p.337)」される

際に、被修飾名詞にある「コト」「サマ」と共通した意味を持つ名詞を指す。

- 9 東条佳奈 (2015) は、先述のとおり、原語に助数詞用法が存在するため、「-セット」は日本語でも助数詞として用いられやすかったとする。しかし、原語に助数詞用法が存在すること、外来語が助数詞として用いられることとの関係については、さらに議論を深めなければ断定はできない。
- 10 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』については「中納言」を、『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』『明六雑誌コーパス』『国民之友コーパス』『国会会議録』パッケージについては「ひまわり」を検索システムとして用いた。
- 11 『神戸大学デジタル版新聞記事文庫』は現在も資料のデジタル化が進められている。本稿で示すデータは2016年4月～5月に調査を行ったものである。
- 12 『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』の範囲は、正確には、前者が1895(明治28)年, 1901(明治34)年, 1909(明治42)年, 1917(大正6)年, 1925(大正14)年, 後者が1894(明治27)年, 1895(明治28)年, 1909(明治42)年, 1925(大正14)年である。
- 13 現代語に関しては、書籍やWebから得た用例なども、適宜、取り上げる。
- 14 これとは異なる認定基準として、疑問詞「何(なん)」の付加を挙げる研究もある(影山太郎他2011, 東条佳奈2014)。しかし、眞野美穂・米澤優(2013), 田中佑(2015)で具体的に述べられているように、この基準だけでは助数詞以外の要素を含んでしまう場合がある。そのため、本稿では(8)を助数詞認定の基準として用いる。
- 15 「一二」「二三」については、次のように、概数数量詞なのか、副詞なのか曖昧なものがある。
  - (i) (二)に関しては貨物が主として各線の終端駅に堆積する事実を見て明かな次第なるが今一二例を挙げれば… (東京朝日新聞 1916/12/31)  
このような例については、文脈および連体修飾要素の有無によって判断し、副詞と捉えられるものと、曖昧なものを除外した。
- 16 近代語には、現代語では用いられない、次のような表現が存在していたようである。
  - (ii) 演劇の広告で一例するが、昔風のピラには芸題と役者名と開演時期位のことを認めたに過ぎない。(大阪朝日新聞 1917/3/2-1917/3/14)
  - (iii) 一例せば或銀行は五十万円の資本を以て五千万円の紙幣を發行せるより其の相場は同紙幣一元に対し漸く二十三四銭に過ぎざるが如し,  
(京城日報 1917/5/10-1917/5/12)  
この他に、「一例して」「一例すると」「一例すれば」「一例せば」「一例せんに」が見られ、計42例が確認されたが、いずれも条件表現と捉えられるものであった。なお、『日本語書き言葉均衡コーパス』には「一例して」が2例見られたが、どちらも「一礼して」の誤植と捉えられるものであった。
- 17 次のような用例は、一見すると、(8)を満たすように見える。
  - (iv) 償還確保のためには生産物の共同販売を条件とし販売代金より一定金額を天引きし資金となすもの多く三十三事例 {0/が} あり,  
(時事新報 1933/2/14)  
しかし、(iv)に記したように、格助詞を補う解釈が可能であるため、本稿では、(8)を満たすとは考えない。

- 18 Token 解釈, Type 解釈の両方を持つ (40) の場合は, Token 解釈の場合は「[八戸開業][長野開業][熊本開業]」が完了済みの事態として, Type 解釈の場合は未完了の事態として解釈される。
- 19 実際, 金愛蘭 (2011) でもそのような用例が確認されている。

## 参考文献

- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論 — 名詞句の構造 —』大修館書店
- 影山太郎・眞野美穂・米澤優・當野能之 (2011) 「第 1 章 名詞の数え方と類別」影山太郎編『日英対照 名詞の意味と構文』pp. 10-35 大修館書店
- 北原博雄 (2016) 「現代日本語の数詞数量詞の分類 — 個体数量詞と内容数量詞: 再考 —」ICR 総合言語科学ラボラトリー・言語研究の実践的応用リサーチユニット・科研費作文支援プロジェクト共催研究会発表資料
- 金愛蘭 (2006) 「新聞の基本外来語「ケース」の意味・用法 — 類義語「事例」「例」「場合」との比較 —」『計量国語学』25-5, pp. 215-236 計量国語学会
- 金愛蘭 (2011) 「20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究 別冊 3』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 久屋愛美 (2013a) 「外来語使用における言語外的要因の分析 — 書き言葉コーパスの利用可能性 —」『第 3 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp. 183-192 国立国語研究所
- 久屋愛美 (2013b) 「現代書き言葉における外来語の共時的分布 — 「ケース」を事例として —」『国立国語研究所論集』6, pp. 45-65 国立国語研究所
- 佐野裕子 (2008) 「「場合」に関する考察 — 接続助詞用法を中心に —」『日本語文法』8-2, pp. 140-155 日本語文法学会
- 田中佑 (2012) 「日本語助数詞の範囲 — 名詞と助数詞の連続性 —」『筑波応用言語学研究』19, pp. 117-126 筑波大学人文社会科学研究所科芸・言語専攻応用言語学領域
- 田中佑 (2014a) 「助数詞「-試合」の現代語における意味 — 類義助数詞「-戦」との比較から —」『日本學研究』43, pp. 435-455 檀国大學校日本研究所
- 田中佑 (2014b) 「近現代日本語における新たな助数詞の成立と定着」筑波大学博士論文
- 田中佑 (2015) 「数詞と結合する二字漢語サ変動詞について」『言語学論叢 オンライン版』8, pp. 14-24 筑波大学一般・応用言語学研究室
- 東条佳奈 (2014) 「名詞型助数詞の類型 — 助数詞・準助数詞・疑似助数詞 —」『日本語の研究』10-4, pp. 16-32 日本語学会
- 東条佳奈 (2015) 「名詞型助数詞の用法 — 準助数詞「セット」と「組」を中心に —」『阪大日本語研究』27, pp. 109-136 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 広田栄太郎 (1969) 『近代訳語考』東京堂出版
- 眞野美穂・米澤優 (2013) 「生成語彙理論による助数詞の分析」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.6』pp. 139-171 ひつじ書房
- 水口志乃扶 (2004) 「日本語の類別詞の特性」西光義弘・水口志乃扶編『類別詞の対照』pp. 61-77 くろしお出版

**参考資料**

- 『聞蔵Ⅱビジュアル』, 朝日新聞社  
『近代女性雑誌コーパス』, 国立国語研究所, 2006  
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』, 国立国語研究所, 2011  
『神戸大学デジタル版新聞記事文庫』, 神戸大学附属図書館  
『国民之友コーパス』, 国立国語研究所, 2014  
『『国会会議録』パッケージ』, 山口昌也, 国立国語研究所, 2014  
『太陽コーパス』, 国立国語研究所 (編), 博文館新社, 2005  
『毎日新聞紙面検索』, 毎日新聞社  
『明六雑誌コーパス』, 国立国語研究所, 2012

**用例出典 (参考資料以外からの用例)**

- [格安スマホ]: <http://toyokeizai.net/articles/-/54608> (最終閲覧日, 2016年6月1日)  
[実践宗教]: 西井涼子, 『死をめぐる宗教実践 南タイのムスリム・仏教徒関係へのパースペクティヴ』, 世界思想社, 2001  
[Longman]: 『ロングマン 現代英英辞典 [5改訂]』, 桐原書店, 2009